

テマ反乱についての覚え書き

中 谷 功 治

はじめに

今から半世紀ほど前、テマ制と呼ばれる軍事行政制度の起源をめぐってビザンツ史学界で活発な論争が展開された⁽¹⁾。けれども、史料情報の乏しさから議論はほどなく沈滞化し、1980年代に入ると、研究の軸足はテマ制の成立時期から当時のビザンツ帝国において「テマ」がはたした具体的役割へと移っていった。主に軍団として史料に登場するテマの実態に即した研究が登場し、その成果は今日にも受け継がれている。とりわけ、リーリエの小アジア防衛論、ケーギによる軍事不安の分析、そしてホルドンの兵士徴募や近衛連隊タグマの研究があげられる⁽²⁾。

これらの研究を受けて筆者がかつて注目したのが、小アジアのテマ軍団が7世紀から9世紀前半にかけてひき起こした一連の軍事的騒乱、「テマ反乱」であった。それはケーギの研究を受け継ぐものではあったが、彼が5世紀から9世紀に至るより広い時間枠と視野の下で軍事不安 Military Unrest 全般を扱ったのに対し、筆者はあくまでテマが中心的役割を果たす反乱に議論をしばって考察した。その成果である論文「テマ反乱とビザンツ帝国」（1986年）は、いまだおおまかな見取り図と雑駁な考察の域を出るものではなかったが、その後もいくつかの論文をつうじて、①8世紀初頭に「テマ連合政権」と呼びうる政治体制が生じたこと、②9世紀20年代のテマ反乱の事実上の終焉により、ビザンツ帝国は中央集権的な皇帝専制体制へとむかった、との仮説を提示した⁽³⁾。

本稿では、再度「テマ反乱」全体を概観し、筆者の「テマ連合政権」論とのつながりの明確化を目指して、一連の出来事の特徴を簡潔にまとめておきたい。

1. 後期ローマ帝国から中期ビザンツ帝国へ

まず、時間的・空間的により広い視野にたつケーギの研究（5世紀後半～9世紀中頃）をもとに、後期ローマから中期ビザンツ時代にかけての軍事上の動向をまとめておこう。

（a）周知のように、ローマ帝国史において3世紀は危機の時代であった。とりわけ

セウエルス朝断絶後の世紀後半は、半世紀間に少なくとも25回の帝位篡奪がくりかえされた。皇帝たちの短命な治世は、それ以前の元首政2世紀半での平均在位、約20年と好対照をなしている。

3世紀末以降、帝国の再建者ディオクレティアヌス帝と再統一者コンスタンティヌス1世によって革新的な諸政策が断行された。ここで注目したいのが、国家の統治において軍隊の指揮権と属州での民事行政権（徴税・裁判など）を分離するという原則である。

この改革をつうじて、かつて皇帝位のすげ替えに「暗躍」した近衛長官 *praefectus praetorio* は文官として、帝国最大の行政区分「道 *praefectura*」の最高責任者となった。「道」の下には「管区 *dioecesis*」やさらに下位の細分化された「属州 *provincia*」があり、近衛長官はこれらすべてを統括した。この整然とした官僚組織に裏うちされた行政は、原則として軍事から切り離された。

一方、軍事面では騎兵を中核にした機動野戦軍 *comitatenses* が帝国各地に設定され、司令官 *magister militum* の指揮の下に置かれた。これに加えて、国境付近にはドックス *dux* が指揮する歩兵主体の国境守備隊 *limitanei* が配置される。外敵からの侵略を受けた国境守備隊は、機動野戦軍の到着まで敵軍の領内侵入をできるだけ小規模にとどめおく役割をになった。

なお、7世紀以降に登場する小アジアのテーマ（軍団）とは、以上にあげた機動野戦軍のうち、オリエント方面軍（アナトリコイ）、アルメニア方面軍（アルメニアコイ）、トラキア方面軍（トラケシオイ）、皇帝直属軍（オブシキオン）が、それぞれ小アジアに展開したものであった⁽⁴⁾。

（b）4～5世紀のローマ帝国にみられる特徴として、東方と西方での統治の安定度のいちじるしい差異をあげることできる。東方では、コンスタンティヌス1世以後、大規模な軍事反乱は減少傾向にあり、武力篡奪は影をひそめる。ただし、対外上の情勢もあって、世紀末のテオドシウス1世に至るまで、皇帝は3世紀後半同様に主に軍隊が擁立する軍人皇帝が占めていた。

5世紀に入ると状況は大きく変化する。政権内外ではげしく動揺をくり返す西方をよそに、東方は政治面でしだいに安定へとむかった⁽⁵⁾。それを象徴するのが、皇帝のコンスタンティノープル常時居住という現象である。これと時をおなじくして、この町は帝国の首都として急速に整備されていった。結果として、テオドシウスまでの軍人皇帝たちが当然のように実施していた親征は、彼の死後ほとんどみられなくなる。378年、首都近くでのワレンス帝の戦死の影響もあっただろう。

以上にあげた軍事篡奪と皇帝親征の消滅という現象の背景として、ディオクレティ

アヌスとコンスタンティヌス帝の時期に導入された、軍事権と行政権の分離の存在を確認しておきたい。民族移動の荒波を回避できた帝国東方においては、このディオクレティアヌス・コンスタンティヌス体制が導入から1世紀をへて、ようやくその効果を見せ始めたのかもしれない。

このような経緯をうけて、皇帝の即位儀礼においても、軍隊の比重は低下するようになり、即位式典の場は首都郊外のヘブドモン練兵場から首都の宮殿横の戦車競技場ヒッポドロームへと移った。ここに、かつてベックが提唱した元老院による選出（後継指名を欠いた場合）、市民たちの歓呼という即位式と、その後の聖ソフィア聖堂に場所を移しての総主教による戴冠という形が整った⁽⁶⁾。以上は帝国国制の脱軍事化と呼べるだろう。

（c）ディオクレティアヌス・コンスタンティヌス体制に変化の兆しが見えるのは6世紀に入ってからである。ユスティニアヌス1世が発布した新法からは、軍事行政面での改革の試みが確認できる⁽⁷⁾。一部の属州では軍民両権の一致が認められたのである。これらはいまだ例外的な事例とみなすことが可能かもしれないが、ユスティニアヌスが再征服し、新たに方面軍司令官が派遣されたイタリアと北アフリカにおいては、政情不安と首都からの遠さもあって変化はさらに進んだ。マウリキオス帝（在位581－602年）は、上記の両軍司令官を「総督（エクサルコス）」と呼んで、軍指揮権のみならず現地の行政権をもゆだねたのである。これは帝国の辺境地域における措置とはいえ、外見上は後のテマ制に近似する現象であった⁽⁸⁾。にもかかわらず、大きな変化は7世紀におとずれる。

（d）602年にドナウ国境で発生した軍事反乱は、総司令官を放逐して首都へと向かい、これに首都でのクーデタが呼応することになった。将兵が擁立する軍人フォーカスがマウリキオス帝を排除して帝位につき、ここに現職皇帝の失脚・殺害という事態が数世紀ぶりに起こった（新帝はヘブドモン練兵場で即位）。そして、フォーカス帝による武力篡奪に続くのは内政の混乱と対外危機であった。610年にはカルタゴ総督（エクサルコス）の息子ヘラクレイオス（在位610－641年）が帝位を再び武力で篡奪する⁽⁹⁾。

ヘラクレイオスとその子孫はほぼ1世紀のあいだ7世紀のローマ帝国に君臨したが、ヘラクレイオス帝没後の後継者をめぐる争いやコンスタンス2世殺害前後の軍事不安など、時代は新たな方向に動き始めてもいた。7世紀末から9世紀20年代にかけては、軍事反乱がくりかえされ、帝位が何度も交替する事態が生じた。とりわけ、7世紀末から8世紀初頭と8世紀末から9世紀初頭にかけては帝位篡奪が断続的に繰り返され、激変といえる事態にいたった。それは3世紀後半の武力篡奪の時代の再来であった。

(e) この時期には皇帝の親征という習慣も復活する。ヘラクレイオス帝による決死のペルシア遠征、後継のコンスタンス 2 世の陸海での出征とイタリア方面への移動、そしてコンスタンスの息子コンスタンティノス 4 世や孫ユスティニアノス 2 世も親征を繰り返す。以後 9 世紀後半にかけて、皇帝が親征を実施することが常態となる。これらは帝国が対外的な危機に瀕したことと関係していたと思われる。

以上のような政治情勢のなか、テマがしばしば反乱を起こしたのが 7 世紀後半から 9 世紀 20 年代までの時期であった。テマ制は地方の軍団司令官による軍指揮権と行政権の掌握を基盤とていたが、この制度が形成されたのもこの時代のことであった。テマ制の登場とは、帝国政治が再び軍事色を深めたことと関係している。

2. テマ軍団が関係した諸事件の概要

7 世紀から 9 世紀にかけて、テマがかかわった軍事反乱や注目すべき事件を列挙したのが下の表である。ここでは簡単にそれらについてまとめ、補足しておきたい。

年代	実行主体	概要	成否	頁
①666/7年	アルメニアコイ軍団	將軍サボリオスが蜂起	×	348
②668年	アナトリコイ軍団	將兵が首都対岸で政府に要求	×	352
+695年	首都クーデタ	元アナトリコイ將軍を擁立・篡奪	○	368
+698年	カルタゴ遠征艦隊	撤退時に反乱・將帥擁立・篡奪	○	370
+711年	ケルソン遠征艦隊	派遣先で反乱・流刑將帥擁立・篡奪	○	378
+713年	首都クーデタ	オブシキオン要人ら官僚擁立・篡奪	○	383
③715年	オブシキオン軍団	遠征軍の反乱・無名役人擁立・篡奪	○	385
④717年	將軍レオン（3 世）	アナトリコイ+アルメニアコイ・篡奪	○	386、395
+726年	ヘラス軍団など	皇帝擁立と首都へ艦隊派遣・敗退	×	405
⑤741-2年	アルタバドス	小アジアのテマを二分する大反乱	△	417-419
⑥776年	小アジアテマ將兵	レオン 4 世に息子の共同皇帝を要求	○	449
⑦791年	小アジア全テマ軍団	帝位をめぐる首都付近に集結	○	465-466
+792年	アルメニアコイ軍団	帝位をめぐる反乱を継続・鎮圧	×	469
⑧803年	バルダネス=トゥルコス	小アジアのテマが反乱	×	479
⑨813年	將軍レオン（5 世）	トラキアにあったテマ軍が擁立・篡奪	○	502
+820年	ミカエル 2 世	首都でのクーデタ	○	(*)
⑩821-3年	スラヴ人トマス	小アジアのテマを二分する大反乱	×	(**)

（「+」は反乱ではないがテマや軍隊がかかわった出来事；「頁」は『テオファネスの年代記』（Boor, C. de(ed.), *Theophanis Chronographia*, vol.1, 1883, Leipzig) のもの；

*Lesmueller-Werner, A. & I. Thurn,(eds.), *Iosephi Genesisii Regum Libri Quattuor*, Berlin, 1978, A.22 (pp.20-21.); Bekker, I.(ed.), *Theophanes Continuatus*, Bonn, 1838, A.25 (p.p.38-40); **cf. Lemerle, P., *Thomas le Slave, Travaux et Memoires* 1, 1965, pp.255-297.)

①はアルメニアコイ軍団の将軍（ストラテゴス）のサボリオスが、皇帝コンスタンツス2世が西方に出征して不在中にくわだてた反乱であった。結局、皇帝軍との決戦を前にして、サボリオスが不慮の死をとげたために反乱は瓦解する。最初期のテマ反乱と呼んでもよいものだが、事件の詳細は明らかではない¹⁰⁰。

②も年代や具体的内容をめぐって不明な点が多い。ともかく、アナトリコイ軍団が都の対岸まで到来し、皇帝に二人の弟との共同統治を要求したらしいが、成功しなかった¹⁰¹。

なお、皇帝の息子たちによる権力闘争は、王朝初代のヘラクレイオスの死後、代々続いている。これらの帝位継承をめぐる争いに軍隊が関与した事例としては、641年のヘラクレイオス帝の死去に続くヴァレンティノス将軍のケースが知られる。ただし、彼の具体的な行動の詳細は研究者たちの想像力をおおいにふくらませて再構築するしかない¹⁰²。

さらに、反乱主体として艦隊が重要な位置を占めていることも指摘しておきたい。ただし、当時の帝国がかかえる艦隊の全体像を描くことは困難で、研究者たちは8世紀初頭時点では軍管区としてのテマには含めていない¹⁰³。

713年のクーデタはオブシキオン軍団の司令官（コメス）らの指示のもと、クーデタの実行部隊としてこの軍団兵が動いたが、政権交代成功後にこの軍団司令官らの首謀者は失脚している。それだけに2年後、再びオブシキオン軍団が起こした反乱③との関連が予想される。ここで注目しておきたいのは、反乱を起こしたオブシキオンの将兵は、自らの司令官を皇帝に推戴していない点である。そもそも、この時代全体を通じてオブシキオン軍団と司令官の反乱・陰謀への関与が何度か確認されるが、その司令官が皇帝位篡奪を目指したのは⑤のアルタバドスの反乱の時だけであった。

なお、オブシキオンの司令官は将軍（ストラテゴス）ではなく「コメス」と呼ばれることに特徴的なように、彼は中央政府の要人であり、また皇帝親衛隊の指揮者としての役割をも果たしていたらしい。つまり、他の地方軍団としてのテマとは性格を異にする可能性がある。少なくとも8世紀初頭までは、オブシキオンを他の小アジアのテマ（軍団にして軍管区）と同列に論じることには慎重でありたい¹⁰⁴。

以上、715年③までの反乱やテマの動向について述べてきたが、筆者は「テマ反乱」

というものをより厳密に定義して用いたいと思っている。すなわち、以下で「テマ反乱」と呼ぶのは、(α) 小アジアの複数のテマが連携して、(β) その将兵がテマ軍団の將軍やその要職にある者を皇帝に擁立、ないしは現職皇帝やその子孫への支持を表明する、そのような形態を取るものとしたい。

以上の定義にしたがうならば、筆者が想定する「テマ反乱」とは、④717年のレオン3世とアルタバスドスによる政権篡奪に始まり、⑩のスラヴ人トマスによる大反乱をもって終結する。次章ではこれらの反乱を中心に、共通する特徴を探っていくことにする。

3. テマ反乱の分析

前章末に提示した定義にもとづき、④～⑩の7つのテマ反乱を中心に考察していく。

④717年、首都コンスタンティノーブル攻略をめざすイスラーム勢力が陸と海から迫るなか、アナトリコイ軍団の將軍レオンは自軍によって皇帝に歓呼され、首都対岸へと攻めのぼった。彼はアルメニアコイ軍団の將軍アルタバスドスと盟約を結び、彼に娘をあたえる約束をした（後にアルタバスドスはオブシキオンの司令官コメスに就任し、皇帝の娘婿として皇族用の爵位クロパラテスを受ける）。首都近郊のニコメディアでレオン軍は皇帝テオドシオス3世の息子や側近たちを捕虜にし、コンスタンティノーブル政府との交渉の結果、無血での首都入城をはたした。皇帝レオン3世の誕生である。

レオンは、即位直後の国家の存亡をかけた首都包囲戦（717－718年）に勝利し、同時期に発生したテマ＝シチリアの篡奪事件を収束させる一方、前帝アナスタシオス2世がオブシキオンの司令官を含む首都の高官たちと画策し、ブルガリア軍を動かした陰謀事件を未然に防いだ。726年のイコン批判開始直後におこったヘラスとキクラデス諸島の反乱も、艦隊戦において粉碎し、これを鎮圧した¹⁵⁾。

⑤741年、レオン3世の死去後、20歳過ぎの皇帝コンスタンティノス5世が小アジアに出撃すると、レオン3世の娘婿でオブシキオン軍団の司令官アルタバスドスが蜂起し、首都を奪って一時的に帝位についた。このテマ反乱は小アジアのテマを二分しての大規模な内乱に発展する。すなわち、アナトリコイ・トラケシオイ・キビュライオタイ（海のテマ）がコンスタンティノス5世を、これに対しアルメニアコイ・オブシキオン、そしてヨーロッパ側のテマ＝トラキアがアルタバスドスを支援した。何度かの激しい戦闘をへて、首都を奪還したコンスタンティノスが最終的に勝利する。

⑥775年、コンスタンティノス5世死去に伴い、共同皇帝のレオン4世がその後を継いだ。この時、皇帝が最初に実施したのが軍隊の強化であった（残念ながら詳細は

不明)。これに対し、「高揚した」小アジアのテマ将兵が上京し、皇帝に対し息子のコンスタンティノス（6世）を共同皇帝とするよう要求した。人々は戦車競技場ヒッポドロームに集結して誓願を5日間続け、皇帝はテマ将兵たちとともに元老院議員や首都の人々から自分と息子への忠誠の宣誓を受けた。こうして新帝の即位がなされたが、年代記はその直後に、レオン4世の弟の皇帝擁立をめざす陰謀の発覚と関係者の処分について伝えている。

以上の一連の出来事についての私の解釈は、皇帝側主導による「やらせ」と反対者の粛正というものである。いずれにせよ、この事件を反乱と呼ぶのは不適切かもしれない。ただし、テマ将兵は既存の皇帝やその政権に反抗するだけでなく、積極的に支持をするケースがあったことを指摘しておきたい¹⁶⁹。

⑦790年、父の死後十年をへて二十歳となった皇帝コンスタンティノス6世は、摂政である母エイレネとその一派から政権を奪おうと画策した。けれども計画は事前に露見し、関係者は処分された。一方、政権基盤をより確実なものとするため、エイレネは全テマ（軍団・軍管区）へと使者を派遣し、皇帝コンスタンティノス6世とともに自分を統治者として認めるように、しかも息子より先に母の名を挙げての忠誠宣誓を要求した。

この時、まさきに反発したのがアルメニアコイの将兵であり、彼らは自軍の將軍を放逐したうえで首都へ向けて進軍した。これに他の小アジアの全テマが合流することになり、軍事的な威圧を受けるかたちとなったエイレネとその取り巻きの宦官たちは政権を去った。

こうしてコンスタンティノス6世の単独統治が実現したが、若い皇帝が外征に失敗し、政権に母親を呼び戻すと、アルメニアコイは再度蜂起する。今回、将兵たちは自分たちの將軍を新たな皇帝に擁立した。しかし他のテマからの支持はなく、アルメニアコイの反乱は皇帝率いるテマ軍によって鎮圧された。その後、コンスタンティノスは母親の陰謀によって盲目とされ、帝位を追われた¹⁷⁰。

⑧802年、エイレネの女帝政権を政府閣僚のニケフォロス（1世）がクーデタで打ち倒して即位すると、翌年に小アジアのテマが結束して反乱を起こし、首都対岸に攻めのぼった。皇帝に擁立されたのはアナトリコイの將軍バルダネス＝トウルコスであった。しかし、皇帝側へと寝返る者が出るなか、バルダネスは政権と交渉に入り、身の安全を条件に戦場を離れた。結局、反乱は瓦解し、皇帝は軍隊を中心に加担者を厳しく処罰することになった。なお、この反乱にアルメニアコイ軍団は不参加だった¹⁷¹。

⑨811年、ニケフォロス1世がブルガリア遠征で戦死し、息子の共同皇帝スタウラキオスも重傷をおってまもなく退位した。新たに即位したのは、ニケフォロスの娘婿

ミカエル1世ランガベであった。新帝はテマ軍団をトラキアに集結させ、ブルガリア軍との決戦に臨んだが、おそらく裏切りなどもあって戦線を離脱して首都に帰還した。残されたビザンツ軍の指揮をゆだねられたのがアナトリコイの将軍レオンであった。テマの将兵は皇帝の軍事的無能とブルガリアへの苦戦に直面し、レオン（5世）を皇帝として歓呼した。結局、政府要人たちは相談のうえ、ミカエル帝にレオンを皇帝として受け入れて退位するよう勧告し、政権交代が実現する¹⁹⁾。

⑩820年のクリスマスにレオンが首都宮殿内で殺害され、彼の盟友でアモリオン出身のミカエル（2世）が皇帝の座についた。これに対し、またしても小アジアの多くのテマが反旗をひるがえした。テマ将兵が皇帝に担いだのは、アナトリコイ軍団のナンバー2（師団長：フォイデラトイのトゥルマルケス）、スラヴ人トマスであった。この反乱にはアルメニアコイとオプシキオン（司令官コメスはミカエルの従兄弟）が参戦しなかったが、反乱は長期にわたる首都包囲戦を含め、大規模な内乱へと発展した。823年にミカエル2世はブルガリア軍の支援を受けて反乱軍を破り、ようやく政権を維持することができた。ここに、事実上テマの反乱は終結する²⁰⁾。

4. 反乱の特徴

以上が8世紀初頭から9世紀初頭にかけてのテマ反乱の概要である。これらに共通して見られる特徴をまとめておこう。

（A）6世紀以前の軍事不安と違い、反乱軍のいずれもが自分たちが支持する人物を歓呼しつつ、首都コンスタンティノープルへ攻めのぼった。テマ反乱は帝国からの離脱・分離運動ではなく、帝位篡奪を目指す活動であった（これは7世紀の事例の多くでも同様）。

（B）テマ反乱は、2つ以上、しばしば小アジアのほとんどのテマが連携するかたちで発生した。アルタバスドス反乱の場合には、二つに分かれて全テマが反乱にかかわることになった。803年のバルダネス＝トゥルコスの反乱の場合、アルメニアコイ軍団は洞ヶ峠を決め込んでいた可能性があるが、このテマについては790～793年の反乱においても単独行動がめだつ²¹⁾。

（C）テマの反乱の発生には、時期的な傾向も見られる。8世紀初頭の発生後は、アルタバスドスの乱を例外に、少なくとも小アジアでは、8世紀末までおおむね平穏な時期がつづいている。そして8世紀末から9世紀初頭にかけて再び反乱が多発化した。これは何を意味しているのだろうか。

（D）数え方にもよるが、成功したテマ反乱の事例は多くない。最終的に帝位篡奪に成功したといえるのは、717年のアナトリコイとアルメニアコイによるレオン3世と

813年のテマ軍団によるレオン5世擁立だけである。両名はともにアナトリコイの將軍であった。

(E) 反乱が発生するのは、遠征軍派遣時と皇帝の代替わりの時であった。前者についてはケーギが力説しており、とりわけ7世紀から8世紀初頭にその傾向が顕著である。すなわち、698年のカルタゴ遠征軍の反乱、711年のケルソン懲罰遠征軍の反乱、そして715年のオブシキオン軍の反乱のいずれもが艦隊派遣をきっかけに勃発している。

けれども、その後の展開をみるならば、提示した事例はおおむね帝位の交替時に発生している。逆からいえば、帝位の交替に際しては必ずといっていいほどに小アジアのテマ軍団は動きをみせるのである。715年のオブシキオン反乱③に対し、717年のアナトリコイとアルメニアコイ④、741年のレオン3世の死去にともなうアルタパドス反乱⑤、776年のコンスタンティノス5世死去の直後、レオン4世死後については、息子コンスタンティノス6世成人後の791年のアルメニアコイの反乱⑦（さらにその後も）、エイレネ失脚後の803年のバルダネスの反乱⑧、ミカエル1世の即位後まもなくの813年の政権交代⑨、そしてミカエル2世の即位直後の821年からのスラヴ人トマスの乱⑩である。これらは8世紀初頭から9世紀20年代、つまり概ねテマ反乱の時期にみられる現象である。

以上A～Eの6つの特徴の意味するところを、私は次のように考えている。すなわち、8世紀初頭から後半にかけて、テマ軍団がコンスタンティノープルの中央政府の後ろ盾となっていた。小アジアのテマ軍団（アナトリコイ、アルメニアコイ、トラケシオイ、オブシキオン、キビュライオタイ（海のテマ）、8世紀後半にはブケラリオイが加わる）は、自分たちのおす人物を皇帝にいただき、彼を中心として国家防衛の責務を担っていた。

そこには力づくでの政権奪取もしばしばみられたが、ローマ帝国の国制の原則になんら違反するものではなかった。国家の存亡を左右しかねないイスラーム勢力の侵攻を前にして、事実上帝国の最後の砦となった小アジアを中心に、非常時の防衛体制が構築されたのである。その背後には、テマの將兵たちと彼らを支える小アジアの住民たちがあった。

筆者はこのような緊急の事態を「テマ連合政権」と呼びたいと思う。確かに、その内実是不透明であり、中央政府がとる施策にテマ將兵の意向や利害がどれほど反映されたかなどいっさいは不明である。けれども、テマ反乱の続発とその発生の傾向は、テマ軍団による軍事政権の存在を示しているようにみえる。

イスラーム帝国がウマイヤ朝からアッバース朝に移行し、東方からの軍事面での脅

威が低減すると、本来は中央集権的な皇帝専制による政治をむねとするコンスタンティノープルの「中央」政府は、危機対応型の不安定な「地方」のテマ勢力に統制を加え始めた。

皇帝位を為政者（摂政政府を含む）や政府要人が決定したり、首都でのクーデタによって政権が交代したりすると、小アジアのテマはきまって反応をしめし、しばしばそれに反対して自分たちの意向を武力で訴えた。776年に既存の皇帝位の長子継承を要請したテマ軍団は、791年にはかつての宣誓にしたがって団結した。失敗に終わったものの、803年にも反乱を起こしたテマ軍団は首都の動向に異議をとねえ、813年には強力な外敵ブルガリア人に対処できない「無能な」皇帝にはノーをつきつけている。

けれども、首都防衛をも担う近衛連隊（タグマ）が増設され²²⁾、テマを地方の行政区として統括する中央政府の優位が次第に確立されていった。9世紀20年代はじめのスラヴ人トマスの大乱をもってテマ反乱は終焉をむかえるのである。

5. おわりに

テマ反乱が終結する9世紀前半とは、ビザンツ帝国にとってどのような時代だったのか。この頃より残存する史料の状況は好転し、帝国がおかれた事態がようやく明確になり始める。宮中晩餐会の席次を決めるための文書は一般に「タクティコン」とよばれるが、その内で現存する最古のものが「ウスペンスキーのタクティコン」（842/3年）である。この「ウスペンスキーのタクティコン」が列挙する帝国最重要の官職の序列をみると、上位をテマの將軍たちが独占していることが判明する。この順序はその後の一連のタクティコンにおいても大きな変化はない²³⁾。

ただし、「タクティコン」に登場するテマは反乱を繰り返した小アジアの5つの主要テマ（リーリエのいう「原テマ Urthemen」）だけではない。たしかに、その最上位はアナトリコイ、ついでアルメニアコイと原テマが続くが、テマ反乱終息期にそこから分離したり、バルカン半島側に新たに創設されたテマも多数登場する。その数は「ウスペンスキーのタクティコン」の時点で19にのぼった。

テマ反乱が終わる時期の史料において、テマ將軍たちの優位が確認されることの意味とは何か。軍民両権の合一というテマ制本来のかたちが明確に確認できるのは、皇帝レオン6世（在位886－912年）による戦術書『タクティカ』を待たねばならないが²⁴⁾、おおむね9世紀前半にはこの制度は完成に向かっていて、という点で研究者たちの意見はほぼ一致している。そしてテマ制が確立しテマが行政区画へと変貌していく時期とは、井上浩一氏によれば、中期ビザンツ国家を特徴づける中央集権的な皇帝専制体制が完成する時代にほかならない²⁵⁾。私見では、それは8世紀の緊急避難的な

小アジアを中心とするテマ連合政権からの脱却によって達成されたのである。8世紀末から9世紀20年代にかけてのテマ反乱の頻発とは、そのような動きへの反動であったと考えられる。

同じ頃、イスラーム世界との対外関係も好転しつつあった。国境付近を除く小アジア内部が大きな侵略を受けることはだいに少なくなる。ここに防衛組織としてのテマはその役割を終えることになり、反乱に失敗したテマは小規模なものへと分割のうえ行政単位として中央政府の統治下に組み込まれていった。同様に、テマ軍団を率いてたびたび出陣した皇帝たちの親征も減少へとむかい、東方での戦場は国境地域に限定されていく。タクティコンに確認されるテマ將軍たちの序列上の優位は、現実を反映したものではなく、かつてのテマ政権期に小アジアのテマが保持した重要性に応じたものであろう。そのトップを占めたのは唯一皇帝を輩出したテマ＝アナトリコイの將軍であった。

実際のテマ連合政権の内実や解体過程については、テマ反乱のより詳細な分析や中央政府の個々の施策の検討、親征する皇帝の行動パターンなど、なお個別に検討する必要がある。今後の課題としたい。

〈註〉

- (1) 拙稿「テマからテマ制へーテマ制度の成立時期をめぐってー」『待兼山論叢』（史学篇）21号、1987年、29-50頁。
- (2) Lilie, R.-J., *Die byzantinische Reaktion auf die Ausbreitung der Araber*, München, 1976; Kaegi, W.E., Jr., *Byzantine Military Unrest*, Amsterdam, 1981; Haldon, J.F., *Recruitment and Conscriptions in the Byzantine Army c.550-950*, 1979, Wien; idem, *Byzantine Praetorians*, Bonn, 1984.
- (3) 拙稿「テマ反乱とビザンツ帝国―「テマ＝システム」の展開―」『西洋史学』144号、1987年、22-40頁；「8世紀後半のビザンツ―エイレーネー政権の性格をめぐって―」『西洋史学』174号、1994年、36-53頁；「レオン3世政権とテマ」『関西学院史学』38号、2011年、1-27頁。
- (4) さしあたり、拙稿「テマの発展―軍制から見たビザンティオン帝国―」『古代文化』41巻、2号、1989年、8-21頁を参照のこと。
- (5) 唯一の例外と呼べるのが5世紀中頃のバシリスコスによる篡奪であるが、彼自身も皇帝家に連なる人物であり、政権も1年以内に元に戻った。なお、篡奪を目指す陰謀などは数多く見られた。cf. Kaegi, *op.cit.*, chap.1; Szidat, J., *Ursupator Tanti Nominis: Kaiser und Ursupator in Der Spätantike (337-476 N. Chr.)*, Wiesbaden, 2010.
- (6) 渡辺金一『コンスタンティノープル千年』（岩波新書、1985年）、第1・2章。

- (7) さしあたり次の文献を参照。Haldon, J., *Economy and Administration: How did the Empire Work ?* in: Maas, M.(ed.), *The Cambridge Companion to the Age of Justinian*, Cambridge, 2005, chapter 2, pp.28-59.
- (8) 拙稿「テーマの発展」第2節参照。
- (9) G・オストロゴルスキー『ビザンツ帝国史』和田廣訳、恒文社、2001年、第3章。
- (10) Stratos, A.N., *Brzantium in the Seventh Century*, vol.3: 642-668, (tr.) Hionides, H.T., Amsterdam, 1975, pp.236-247.
- (11) 『テオファネスの年代記』はこの事件を669/670年の項に記しているが、一部の研究者は681年のブルガリア遠征との関連で見ようとする。cf. Turner, D., *The Trouble with the Trinity: The Context of a Slogan during the Reign of Constantine IV (668-685)*, *Byzantine and Modern Greek Studies* 27, 2003, pp.68-119.
- (12) 事件の概要は井上浩一『ビザンツ皇妃列伝』（白水社、2009年）の第3章に詳しい。
- (13) 艦隊については拙稿「ビザンツ艦隊をめぐる考察」『史林』94-4、2011年、71-88頁を参照。
- (14) オプシキオン軍団およびその司令官コメスは、680/1年の公会議署名リスト、さらに687年の教皇宛書簡に登場する他、8世紀の他の陰謀事件にもたびたび名前が挙がっている。ただし、8世紀後半以降は地方軍団としての性格を強めてゆき、他の小アジアのテーマと区別は見えなくなる。詳しくはHaldon, *Byzantine Praetorians*, pp.164-182, 191-205.
- (15) 拙稿「レオン3世政権とテーマ」第3章を参照。
- (16) 事件をテーマ将兵の皇帝の軍事政策への不満と見る研究者もある。cf. Whittow, M., *The Making of Orthodox Byzantium 600-1025*, London, 1996, p.170.
- (17) 拙稿「8世紀後半のビザンツ」を参照。
- (18) 拙稿「ビザンツ帝国のバルカン半島政策（8世紀後半～9世紀初頭）—ニケフォロス1世の戦死を考える—」『愛媛大学教育学部紀要』32巻1号、1999年、15-39頁を参照。
- (19) *Theophanis Chronographia*, pp.492-493, 502-503.
- (20) 例外として866年夏のオプシキオンとトラケシオイの蜂起があるが、ほどなく鎮圧されている。cf. Bekker, I.(ed.), *Theophanes Continuatus*, Bonn, 1838, p.240. 11-23.
- (21) ケーギはレオン3世即位のケースを除いて、アナトリコイとアルメニアコイとの間の対立を軸に反乱の傾向を見出そうとしている。cf. Kaegi, *op.cit.*, pp.231-4. なお、シチリアでの何度かの反乱は、都から離れていることもあり、小アジアとは同列には論じにくい。
- (22) 拙稿「タグマについて—8世紀ビザンツにおける近衛連隊の誕生—」『関西学院史学』30号、2003年、94-114頁。
- (23) Oikonomidès, N.(ed.), *Les listes de préséance byzantines des IX^e et X^e siècles*, 1972, Paris, p.47,49.
- (24) Dennis, G.(ed./tr.), *The Taktika of Leo VI*, Washington D.C., 2010, 1.9 (pp.14.28-33).
- (25) 井上浩一『ビザンツ帝国』（岩波書店、1982年）、第1章。